血中食物抗原特異的 IgG 抗体検査に関する当院の見解

最近、一部の医療機関で、血中食物抗原特異的 IgG 抗体検査を、**アレルギー検査（遅延型フードアレルギー検査 IgG 等）と称して施行している医療機関**を散見します。当院受診の患者様にも、このような検査を他の医療機関で施行され、食事制限を指示されている方がおられます。このような検査は、国外の（主にアメリカ）で検査が施行され、保険が適用にならないことから、極めて高額の医療費（数万円）を請求する医療機関があるようです。この**血中食物抗原特異的 IgG 抗体検査は、下記の理由で医学的根拠に乏しく**、**日本はもとより、アメリカ、ヨーロッパの各アレルギー学会から正式に診断的有用性を否定されています**。

当院院長は、アレルギー学会専門医・指導医として、血中食物抗原特異的 IgG 抗体検査に対して、従来から下記のような対応を一貫して行ってまいりました。

１．　血中食物抗原特異的 IgG 検査の意義が明らかになっていないこと
２．　１９８０年代の終わり頃から抗原特異的 IgG の意義は検討されているものの、食物アレルギーの発症とは関係せず、
３．　むしろ、当該食品が食べられるようになってくると IgG 値が上昇したり、
４．　治療目的で食物を投与し、食事制限解除成功後に特異的 IgG 値が高値になることから、
５．　**IgG の食物アレルギーの診断的価値は極めて疑問が残ると考え、一切推奨しておりませんでした。当院では、上記のアメリカに検査依頼する IgG の特殊な検査を検査した症例は一例もありません。（当院では、この検査は一切行っていません）**
６．　**当院で行っている食物アレルギー検査は、日本アレルギー学会および日本小児アレルギー学会、食物アレルギー研究会が推奨している下記の検査のみです。**

・食物抗原特異的 IgE 検査
・スクラッチテスト
・食物除去試験
・食物負荷試験
（当院では２０１４年１１月１３日までに、２２０例の症例数があります。全国の専門施設での上位５％以内の水準であり、県内では獨協医大小児科に次いで第２位の症例数です）
・食物特異的 ALST（アレルゲン特異的リンパ球刺激試験）検査（まれ）
・食物特異的 HRT（ヒスタミン遊離試験）（まれ）

なお、日本小児アレルギー学会の１１月１９日付のコメント（学会員宛注意喚起事項）を下記に公表いたします。

平成 26 年 11 月 19 日
日本小児アレルギー学会　食物アレルギー委員会

血中食物抗原特異的 IgG 抗体検査に関する注意喚起

日本小児アレルギー学会は、食物アレルギーの原因食品の診断法として IgG 抗体を用いることに対して、「食物アレルギーハンドブック 2014 子どもの食に関わる方々へ」（2014 年日本小児アレルギー学会発刊）において推奨しないことを注意喚起しています。米国や欧州のアレルギー学会でも食物アレルギーにおける IgG 抗体の診断的有用性を公式に否定しています。
その理由は、食物抗原特異的 IgG 抗体は食物アレルギーのない健常な人にも存在する抗体であり、この IgG 抗体検査結果を根拠として原因食品を診断し、陽性の場合に食物除去を指導すると、原因ではない食品まで除去となり、多品目に及ぶ場合は健康被害を招くおそれもあるからです。
日本小児アレルギー学会は食物抗原特異的 IgG 抗体検査を食物アレルギーの原因食品の診断法としては推奨しないことを学会の見解として発表いたします。

参考文献：
食物アレルギーハンドブック 2014 子どもの食に関わる方々へ」(2014 年日本小児アレルギー学会発刊)
Stapel SO, et al. Allergy 2008; 63: 793-796.
Bock SA, et al. J Allergy Clin Immunol 2010; 125: 1410.
食物アレルギーガイドライン 2012（日本小児アレルギー学会）
食物アレルギーの診療の手引き 2011（厚生労働科学研究班）

グリムこどもクリニック院長
日本アレルギー学会認定専門医・指導医（小児科）
日本小児科学会認定専門医
福田典正